

## 出土した遺物(道具)



遺跡から発見された遺物のほとんどは、江戸初期から幕末にいたるまでの四谷塩町の町屋に暮らしていた人々が使用していた道具です。台地上では腐りやすく残りにくい木製品や漆器もまとまって出土しています。遺物は、陶磁器・土器や瓦を中心に、木製品、玩具など

の土製品、金属製品、骨角貝製品、石製品、ガラス製品、貝などの食べかすなど多量に発掘されました。なかには、江戸初期の中国・国産陶磁器、一分判金(一両の四分の一)、五三の桐が象られた家紋瓦、生産活動に関連する埴塙や鉄滓(くず)、漆工具など職人の道具や廃材も出土し、当時の生業や暮らしがうかがわれます。

このほか、埋没谷を中心に縄文土器の破片や打製石斧もわずかながら出土しています。



【江戸時代前期(約350年前)のやきもの】 ①-1-227B号遺構出土



【染付鷺沢瀉文大皿】



【染付蓋物】



【泥面子】



【水滴】



【埴塙】 金属を溶かす時に使う耐熱容器



【漆工に使用した碗】  
内面には赤色漆が塗られ、漆紙が付着していました。



【銅製柄鏡】



【家紋瓦(左:五三桐文、中央:巴藤文、右:六葉葵文?)】



【一分判金】 \*原寸大

# 新宿区四谷一丁目遺跡 遺跡見学会

主催：公益財団法人 東京都スポーツ文化事業団 東京都埋蔵文化財センター  
共催：新宿区  
協力：UR都市機構・大成建設株式会社

新宿区四谷一丁目遺跡(新宿区No.11遺跡)は、新宿区四谷一丁目、本塩町、市谷本村町の外堀通り沿いに位置する、縄文時代と江戸時代の複合遺跡です。これまでに5回の発掘調査が行われており、寛永13年(1636年)の江戸城外堀普請に伴う造成跡やその前後に設けられた武家屋敷や町屋の遺跡が発見されています。

6回目の調査にあたる今回の調査地点は、現在の本塩町、江戸時代には「四谷塩町一丁目」と呼ばれた町屋の範囲に該当します。都心部の町屋遺跡は、多くが今日も商業地として利用されており、今回のように町全体を発掘する事例は少なく、近世都市江戸を考える上で貴重な資料となります。

今回注目されるのは、四谷塩町一丁目が発立する以前の江戸時代はじめの様子が明らかになりつつある点です。将軍徳川家光が行った寛永13年の江戸城外堀普請は、谷地形を巧みに利用して外堀を構築したことが知られています。今回の調査地一帯も元々の地形は起伏があったようで、これまでの調査の結果、谷の埋め立てや小高い台地を切り盛りした状況が確認されてい

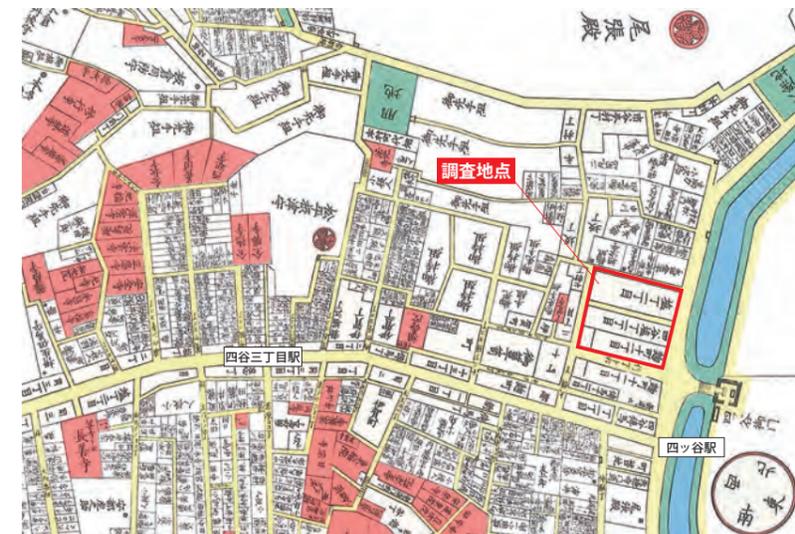
ます。この外堀普請と前後して行われた四谷周辺の街区の造成工事によって、現在の町並みの原形となる都市のインフラが調い、以来この地には現在まで連なるまちの歴史が刻まれていくこととなります。

さらにもうひとつ注目すべき点は、多数の麴室が発見されたことです。麴室は酒や味噌に用いる麴菌を培養する地下施設と考えられ、これまでに6群24基が見つかっています。今後の調査でも増える可能性が高く、外堀普請以前にも麴製造を行っていた人々が一帯で活動していたことを物語る資料と言えるでしょう。

この見学会を通じて、四谷のまちの歴史に、江戸の歴史に、あらためて関心を寄せていただければ幸いです。

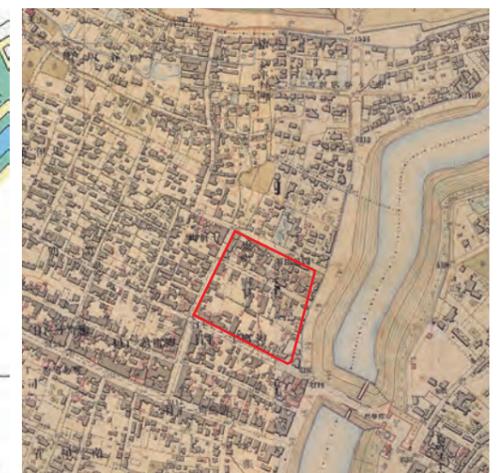


【遺跡北東から都庁方面を臨む】 撮影協力：住友生命四谷ビル



【幕末・嘉永3年(1850年)の四谷界わい】

「千駄ヶ谷鯉ヶ橋四ツ谷絵図」(新宿区教育委員会『地図で見る新宿区の移り変わり 四谷編』より、一部改変)



【明治16年(1883年)の四谷界わい】  
「五千分一東京図測量原図」参謀本部陸軍部測量局、一部改変

## 発見された遺構

これまでの発掘では、礎石建物跡や土蔵跡、地下室・穴蔵が道に沿って連なるようすや、井戸や排水溝、溜枳などの上下水道施設、便所の埋甕、埋桶、大型のかまど、麴室、ごみ穴、胞衣埋納遺構（出産後に胎盤を納めて土に埋めた遺構）など 600 基を超える遺構（穴や建物など構造物の跡）が発見されました。また、外堀普請に伴うものと思われる大規模な谷埋めや盛土・切土といった地業跡も確認されています。

このうち、現在ご覧いただける遺構のいくつかを紹介いたします。

### ちかむる地下室

江戸時代の遺跡からよく発見される遺構のひとつに地下室があります。通常、台地上の遺跡では、関東ローム層の安定した地盤を活かして階段を伴う地下室が多いのですが、この遺跡では、はしごなどを使って上り下りする箱形のタイプ（写真）が多いのが特徴です。なかには、木枠や床板が残存しているものも発見されています。江戸時代の「穴蔵（窖）」にあたるものと考えられ、火事が頻発した江戸のまち、大切な家財道具などを守る地下防火施設として使われていたと言われています。

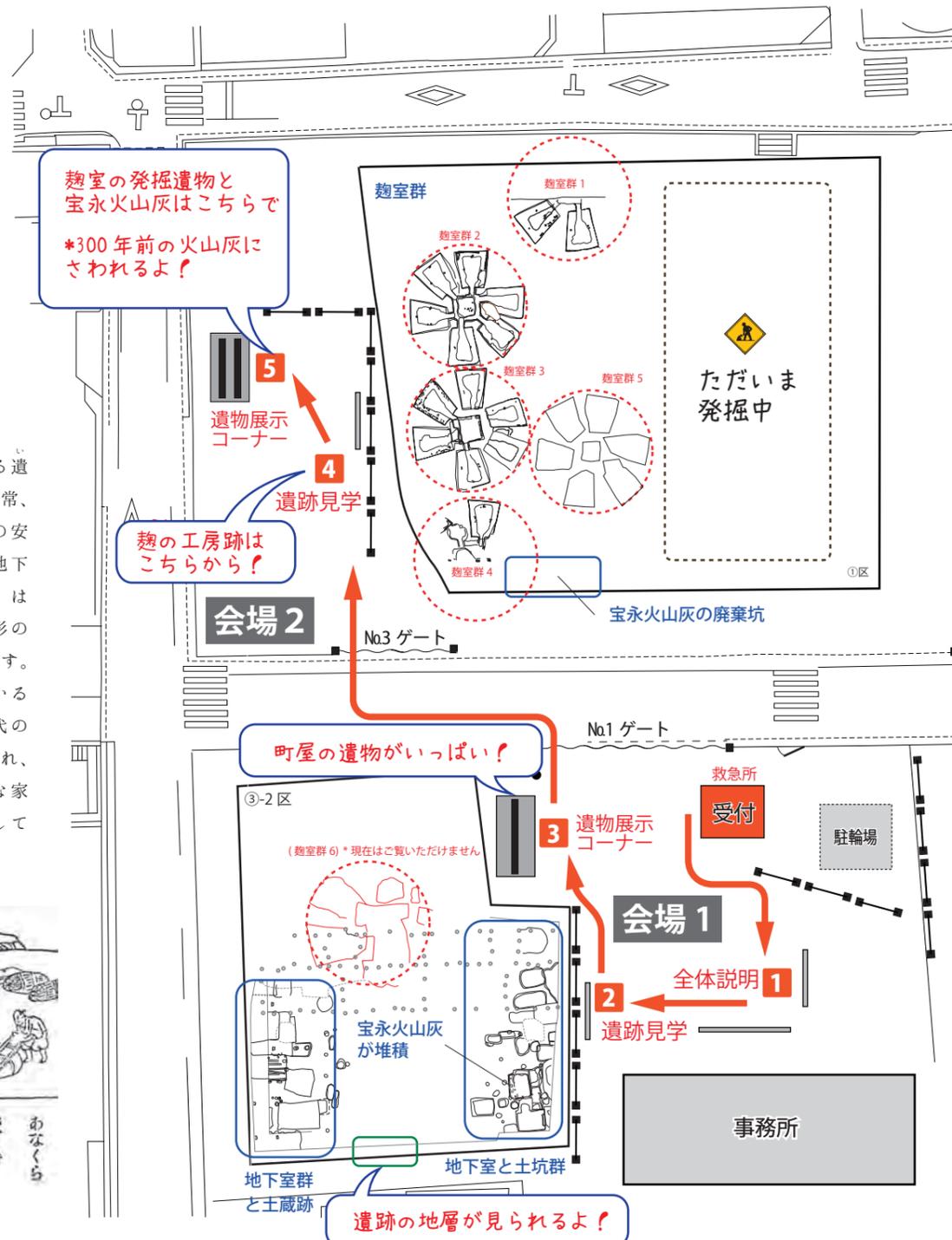


窖  
あなぐら

【地下室】 ③-2-023号遺構（会場1）

【和漢三才図絵に見られる穴蔵の図】（右上）

（巻81 家宅、国立国会図書館近代デジタルライブラリー）



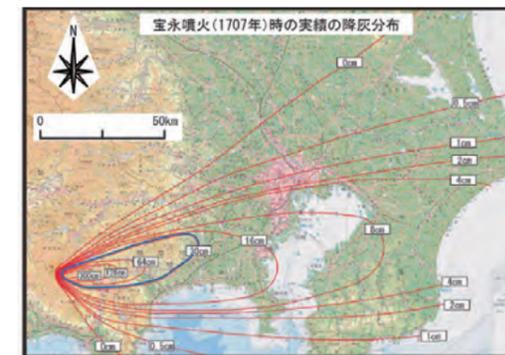
## 麴の工房跡発見！

地中深くから、酒や醤油、味噌、味噌などの製造に欠かせない麴（糎）の培養に用いられた地下式の麴室が発見されました。昇降用の竪坑が地下約3～4mまで垂直に掘られ、せまい横穴の通路を掘って、放射状に室部が設けられる構造となっています。麴室は、四谷塩町一丁目が起立する外堀普請以前に構築されたものと推測しています。江戸時代のはじめ（350年以上前）に四谷地域には、麴を扱う職種の人々が活動していたことを示していると思われます。

## 災害の爪あと～富士山宝永噴火

③-2-079号（会場1）・①-1-417号遺構（会場2）、2つの遺構から発見された黒い細砂は、宝永4年（1707年）に噴火した富士山の宝永火山灰と考えられます。江戸における被害のようすを今に伝える発見です。

このほかには幕末・嘉永5年（四谷界わいに甚大に被害をもたらした幕末・嘉永5年の火災のほか、焼けた瓦や壁土が大量に廃棄された遺構が残されていました。



宝永噴火（1707年）の降灰範囲  
「富士山火山防災マップ」富士山火山防災協議会（1998）より



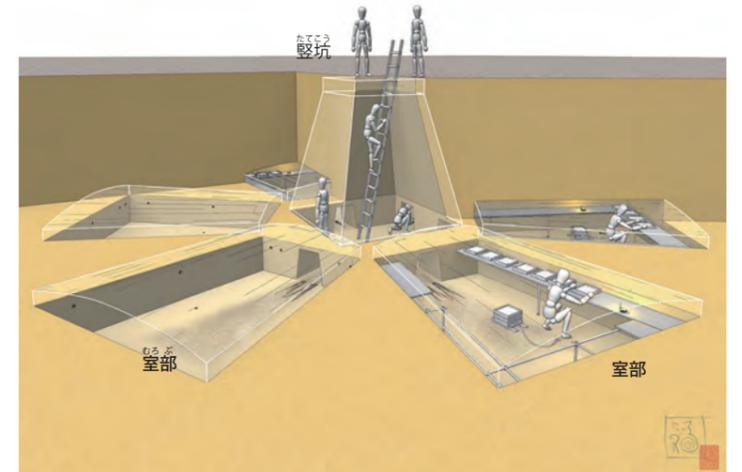
宝永火山灰を集め捨てた処理坑（①-1-417号遺構・会場2）



宝永火山灰の降灰層が（③-2-079号遺構・会場1）

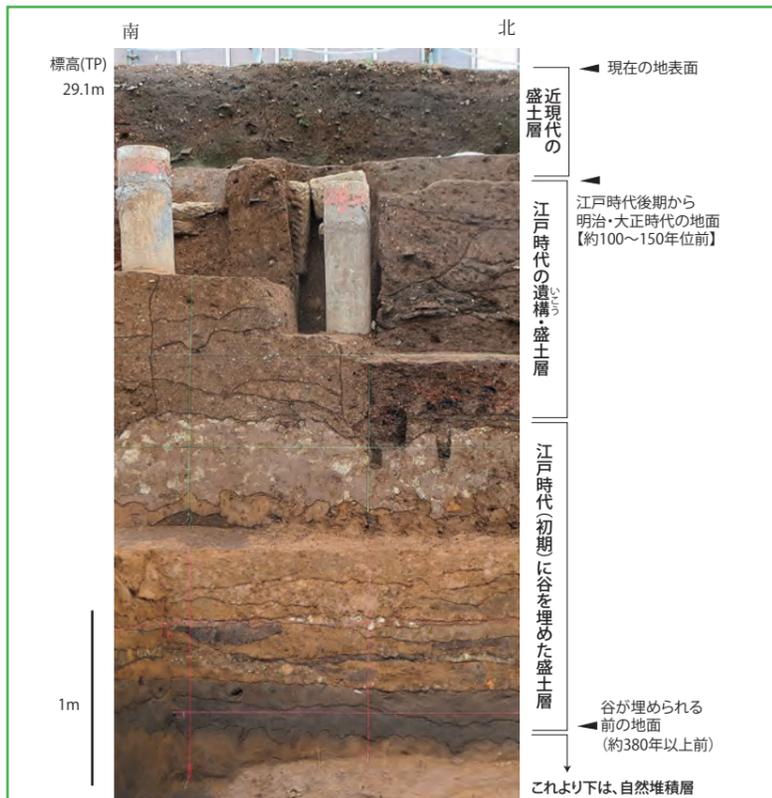


【麴室群2】（会場2） 室部の天井付近まで地面を掘り下げたようす。



【麴室の構造（イメージ）】

CG制作：浅岡 清明



## 谷を埋めてまちがつけられた！

かつては靖国通り（旧「紅葉川」）に連なる谷が敷地の北西側に入り込んだ緩やかな斜面地でした。外堀普請に伴って、最深3m以上もの谷埋め盛土によって形成された平坦地であることがわかりました。（\*見学会ではご覧いただくことができません）